

市原市中潤ヶ広遺跡(1)

—主要地方道五井本納線住宅地関連委託（神崎工区）埋蔵文化財調査報告書—

平成17年3月

千葉県県土整備部

財団法人 千葉県文化財センター

いち はら なか うる が ひろ
市原市中潤ヶ広遺跡(1)

—主要地方道五井本納線住宅宅地関連委託（神崎工区）埋蔵文化財調査報告書—





SM-01・02全景（西から）



SM-01・02全景（東から）

序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第518集として、千葉県県土整備部の主要地方道五井本納線事業に伴って実施した市原市中潤ヶ広遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、古墳時代後期の円墳2基と中世の溝跡などが発見されました。この地域には多くの古墳群が所在していますが、その一端を明らかにする上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また地域の歴史資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成17年3月25日

財団法人千葉県文化財センター
理事長 清水新次

凡 例

- 1 本書は千葉県県土整備部による主要地方道五井本納線住宅宅地関連委託（神崎工区）事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は千葉県市原市潤井戸天古墳群ケ台2,273-19ほかに所在する中潤ヶ広遺跡（遺跡コード219-081）である。
- 3 調査地点は、千葉県埋蔵文化財分布地図（3）及び市原市埋蔵文化財分布地図改訂版の記載では潤井戸潤ヶ台遺跡群及び潤井戸天王古墳群に含まれるが、本書では中潤ヶ広遺跡として報告する。
- 4 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部（現県土整備部）の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 5 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 6 本書の編集・執筆は、上席研究員伊藤智樹が担当した。
- 7 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県県土整備部千葉地域整備センター市原整備事務所、市原市教育委員会、財団法人市原市文化財センター、宮本敬一氏、西野雅人氏、木對和紀氏、櫻井敏史氏の御指導、御協力を得た。
- 8 潤井戸天王古墳群全体図及び遺構平面図の作成にあたっては、隣接する独立行政法人都市再生機構潤井戸地区埋蔵文化財調査の成果の一部を使用した。
- 9 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第1図	市原市発行	1/2,500市原市基本図D7 (IX-L E87-2) を改図転載
第3図	市原市発行	1/2,500市原市基本図D7 (IX-L E87-1) 1/2,500市原市基本図D8 (IX-L E87-2) を改図転載
第4図	国土地理院発行	1/25,000地形図「蘇我」(N I-54-19-15-2) 「海土有木」(N I-54-19-16-1)
- 10 周辺航空写真は、京葉測量株式会社による昭和47年2月撮影のものを使用した。
- 11 本書で使用した図面の方位は、日本測地系に基づく座標北である。
- 12 土器実測図の断面については、須恵器は黒塗りとし、それ以外は白抜きとした。
- 13 図に使用したスクリーントーンの用例は、各挿図に明示した。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	1
3 調査の方法と概要	2
4 遺跡の地理的環境と周辺の遺跡	4
第2章 遺構と遺物	10
第1節 古墳と遺物	10
第2節 その他の遺構	27
第3章 まとめ	30
報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図 遺跡の位置と調査範囲	2	第11図 SM-02第1主体部と出土遺物	17
第2図 グリッド設定図及びトレンチ配置図	3	第12図 SM-02第2主体部	18
第3図 潤井戸天王台古墳群・潤ヶ広古墳群 全体図	5	第13図 SM-02第2主体部遺物出土状況	19
第4図 中潤ヶ広遺跡と周辺の遺跡	7	第14図 SM-02第2主体部出土遺物(1)	20
第5図 古墳調査前測量図	11	第15図 SM-02第2主体部出土遺物(2)	21
第6図 SM-01平面図	12	第16図 SM-02第3主体部	23
第7図 SM-01墳丘断面図	13	第17図 SM-02第3主体部出土遺物	24
第8図 SM-01周溝内遺物出土状況と 出土遺物	14	第18図 SM-02第4・第5主体部	25
第9図 SM-02平面図と墳丘断面図	15	第19図 古墳出土のその他の遺物	27
第10図 SM-02出土遺物	16	第20図 SK-01	28
		第21図 SD-01・02・03平面図	29

表目次

表1 金属製品計測表	26
------------	----

図版目次

- 巻頭図版 SM-01・02 全景
- 図版1 遺跡周辺航空写真（昭和47年撮影）
- 図版2 SM-01 調査前全景・SM-01 完掘後全景・SM-01 完掘後全景
- 図版3 SM-01 西側周溝及びSD-01 全景
SM-01 周溝内遺物出土状況・SM-01 周溝内遺物出土状況
- 図版4 SM-02 調査前全景・SM-02 調査状況・SM-02 第1主体部検出状況
- 図版5 SM-02 第1主体部棺部検出状況・SM-02 第1主体部遺物出土状況・SM-02 第1主体部完掘状況
- 図版6 SM-02 第2主体部検出状況・SM-02 第2主体部調査状況・SM-02 第2主体部棺部検出状況
- 図版7 SM-02 第2主体部遺物出土状況・SM-02 第2主体部遺物出土状況・SM-02 第2主体部完掘後全景
- 図版8 SM-02 第3主体部全景・SM-02 第3主体部遺物出土状況・SM-02 第4主体部完掘後全景
- 図版9 SM-02 第5主体部完掘後全景・SM-02 テラス部遺物出土状況・SM-02 東側周溝
- 図版10 SK-01 検出状況・SK-01 完掘後全景・SD-02・03 全景
- 図版11 第2地点西側調査状況・第2地点中央部調査状況・第2地点東側調査状況
- 図版12 古墳出土金属器（1）
- 図版13 古墳出土金属器（2）
- 図版14 古墳出土金属器（3）
- 図版15 古墳出土土器・石器

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査に至る経緯

千葉県県土整備部は、交通量の増加に伴い主要地方道五井本納線の拡幅工事を決定した。このうち、市原市神崎から潤井戸に至る区間は、独立行政法人都市再生機構千葉地域支社による潤井戸地区宅地造成事業が実施されており、これに合わせて道路改良事業を着手するに至った。事業区域内に所在する埋蔵文化財の有無について、千葉県教育委員会に照会した結果、当該用地内は古墳等の埋蔵文化財が所在する周知の遺跡であることから、その取扱いについて千葉県教育委員会と千葉県県土整備部との間で慎重な協議が重ねられた。その結果、現状保存が困難な部分については、やむを得ず発掘調査による記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

2 調査の経過

発掘調査は、平成13年度から断続的に行われている。このうち今回報告するのは、平成13年度と平成14年度に行った地区（神崎工区）であり、本書では平成13年度の地区を第1地点、平成14年度の地区を第2地点として報告することにする。整理作業は、平成16年度に実施した。発掘調査および整理作業に関わる各年度の作業内容および担当職員は以下のとおりである。

(1) 発掘調査

○第1地点（平成13年度）

期 間 平成13年8月1日～平成13年12月21日

内 容 確認調査 上層164m²/1,870m²、下層24m²/1,870m²

本調査 上層900m²、下層0m²

担当者 南部調査事務所長 高田 博 市原調査室長 今泉 潔

○第2地点（平成14年度）

期 間 平成14年4月1日～平成14年4月30日

内 容 確認調査 上層740m²/740m²、下層32m²/740m²

本調査 上層0m²、下層0m²

担当者 南部調査事務所長 鈴木定明 上席研究員 稲生一夫

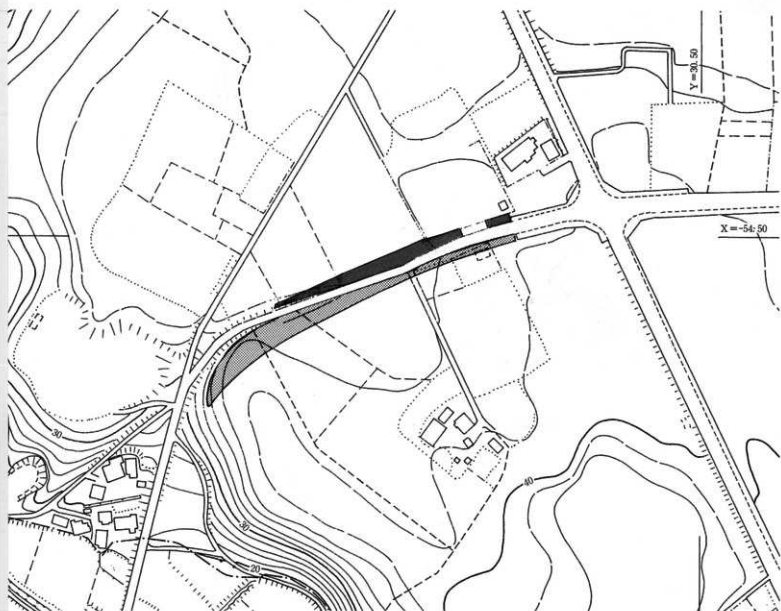
(2) 整理作業

○平成16年度

期 間 平成16年4月1日～平成16年7月31日

内 容 水洗・注記～報告書刊行

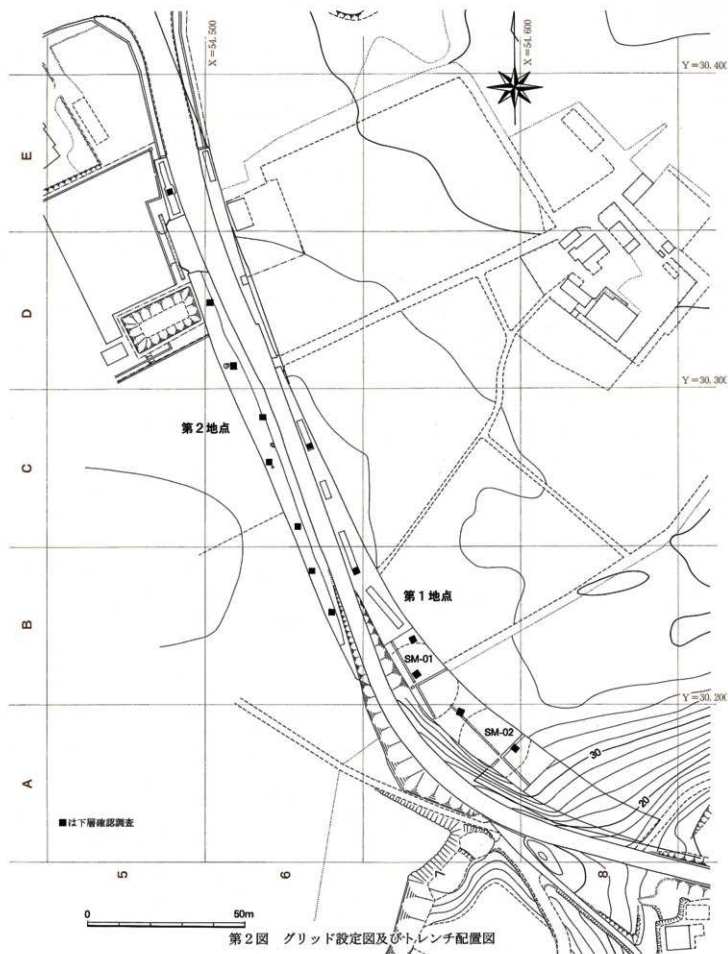
担当者 南部調査事務所長 高田 博 上席研究員 伊藤智樹



第1図 遺跡の位置と調査範囲(1:2,500)

3. 調査の方法と概要

発掘調査は、基本的にグリッドを設定して行った。グリッドの設定に際しては、調査区域が独立行政法人都市再生機構潤井戸地区埋蔵文化財調査（以下「潤井戸地区」と呼ぶ。）の事業区域の北側外縁部に位置しており、すでにこの地区を包括する大グリッド内に今回の調査区域が入っていたため、グリッドの設定や呼称も潤井戸地区に合わせたものとした。従って大グリッドは50m×50m、小グリッドは大グリッドを5m×5mの100分割にしたものを基準とした。調査区域にかかる大グリッドは、横列西から東方向がA・B・C・D・E区、縦列北から南方向が5区～8区である。小グリッドの呼称は大グリッドとの組み合わせによってA5-00, 01のようにした。また、調査区域の幅が狭い箇所はトレンチを設定して上層の確



第2図 グリッド設定図及びトレンチ配置図

認調査を実施した。旧石器時代の遺物等を確認する目的で行う下層の確認調査は、調査対象面積の4%にあたる面積を目安として実施した。

第1地点は、西東方向に延びる県道五井本納線の南側にあたる地点の1,870㎡が調査対象範囲である。調査区は現道に沿って大きくカーブしており、西側で幅が広く、東側で幅が狭くなっている。区域内は潤井戸天王台古墳群の一角を占め、当初から古墳2基が存在していることが判明していたため、これらについては墳丘の地形測量の実施後、本調査に移行した。古墳は東側をSM-01、西側をSM-02とした。

古墳から東側の区域は、現道に沿ってトレンチを設定して上層の確認調査を実施した。その結果、遺構、遺物は希薄であったため、最終的にはこの区域を除外した古墳2基の範囲、900㎡の本調査を実施した。

古墳の調査では、SM-01では埋葬施設が検出されなかったが、SM-02で5基の埋葬施設と土坑1基を検出した。また両古墳の間に溝(SD-01)1条と道路跡2条を検出した。調査当時は道路跡には遺構番号が付されていなかったため、整理段階でSD-02・SD-03とした。

下層の確認調査は古墳の調査終了後2m×2mのグリッドを6か所に設定して実施したが、遺物等は発見されなかった。

第2地点は、現道を境にした第1地点の北側にあたる地点の面積740㎡が調査対象範囲である。上層の確認調査は調査区域が狭小であったため、全域を表土除去して遺構等の検出を行った。その結果、現在の耕作痕や木根痕等に混じり土坑状の掘り込み3基を検出した。遺物では、縄文時代中期と思われる土器片数点と奈良・平安時代と見られる土師器片数点が出土した。土坑状の掘り込み3基については、整理の過程で検討した結果、平面形や強形の形状が不定形で遺物も出土していないため、人為的な遺構として断定するに至らなかった。下層確認調査は、2m×2mのグリッドを8か所に設定して実施したが、遺物等は発見されなかった。

4 遺跡の地理的環境と周辺の遺跡

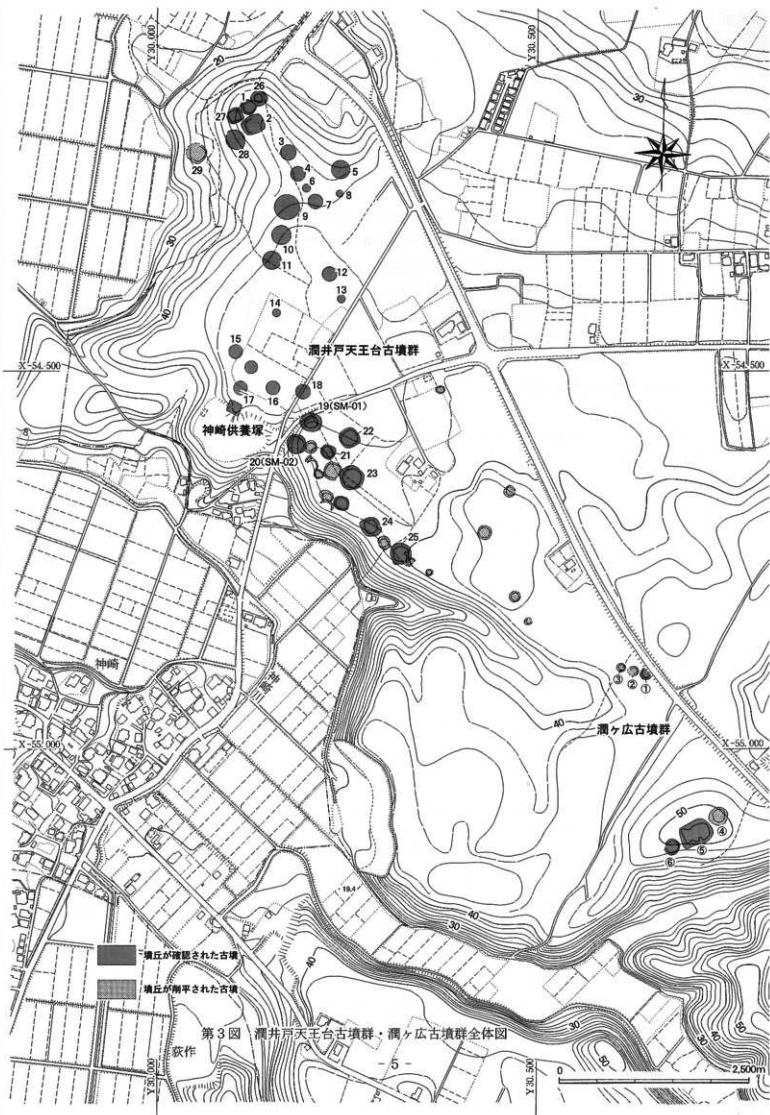
(1) 遺跡の位置と周辺の地形

中潤ヶ丘遺跡は市原市の北部、潤井戸天王台に所在し、標高39m～45m前後の台地上に位置している。台地は、西流して東京湾に注ぐ村田川と遺跡の西側を北流して村田川と合流する神崎川及び東側から進入する深い支谷に挟まれ、ちょうど南北方向に張り出した格好になっている。北面にあたる村田川左岸ではいくつかの段丘面が形成され、なだらかな地形となっている。一方右岸では沖積低地との比高15m～20m程の波蝕崖が形成されており、左岸の状況と趣を異にしている。

遺跡のある台地上は東西約1.5km、南北約2.5kmの広い平坦面を形成しているが、南は神崎川方向から入り込む浅い谷、東は村田川の沖積低地から入り込む支谷によって分かたれ、この東西二つの谷頭部を結んだ地域が中潤ヶ丘遺跡（潤井戸潤ヶ丘遺跡）の南限となっている。

(2) 中潤ヶ丘遺跡（潤井戸天王台古墳群）の概観

調査地は、台地を西から東に貫通する県道の西側縁辺にあたる地点で、中潤ヶ丘遺跡の北西端及び台地西側縁辺部に一群を成す潤井戸天王台古墳群の一角である。潤井戸天王台古墳群は、これまでに円墳や方墳からなる総数28基の古墳で構成される一群と見られてきたが、ここ数年の調査の結果、多数の墳丘を失った古墳が存在し、その数は40基以上になることが明らかになった。台地北西端の一角では、都市計画道路の建設に伴い市原市文化財センターにより計6基の古墳が調査され、乳文鏡をはじめ直刀・鉄鏃など



の武器やガラス玉・耳環など豊富な副葬品が出土している¹⁾。出土遺物の検討から1号墳(円墳:径16.5m)・2号墳(方墳ないし前方後方墳:長さ14m)・27号墳(方墳:長さ14m)が古墳前期, 26号墳(円墳:径16.5m)・28号墳(円墳:径20m)・29号墳(円墳:径20m)が古墳時代後期の築造と考えられている。一方「潤井戸地区」中潤ヶ広遺跡では、潤井戸天王古墳群の大部分と南側の潤ヶ広古墳群が調査され、前方後円墳1基、円墳25基が検出されている。潤井戸地区については現在整理作業中のため詳細は本報告に譲るが、前方後円墳(潤ヶ広古墳群5号墳)は横穴式石室1基と木棺直葬の土坑墓2基の主体部を持つ。横穴式石室は崩壊のため遺存状態が悪く目立った出土遺物はないが、土坑墓からは直刀・金銅製耳環・玉類が出土しており、古墳時代後期に位置づけられる²⁾。円墳では23号墳(083)で横穴式石室と複数の土坑墓が検出されている。古墳以外の遺構は台地南側平坦面(潤ヶ広遺跡)に多く認められ、旧石器時代のブロックや縄文時代中期加曽利E期の小集落、弥生時代中期の方形周溝墓群、弥生時代後期から古墳時代前期の集落、奈良・平安時代の方形墳墓群などが検出されている³⁾。周辺の遺跡は、本遺跡の南東に谷を隔てて下鈴野遺跡・下鈴野古墳群、東には前方後円墳2基、円墳8基からなる潤井戸山王後古墳群、全長約57mの前方後円墳・潤井戸杉山1号墳と円墳2基の潤井戸杉山古墳群、また北側の段丘面には西山遺跡、居鞍古墳群などが存在している。

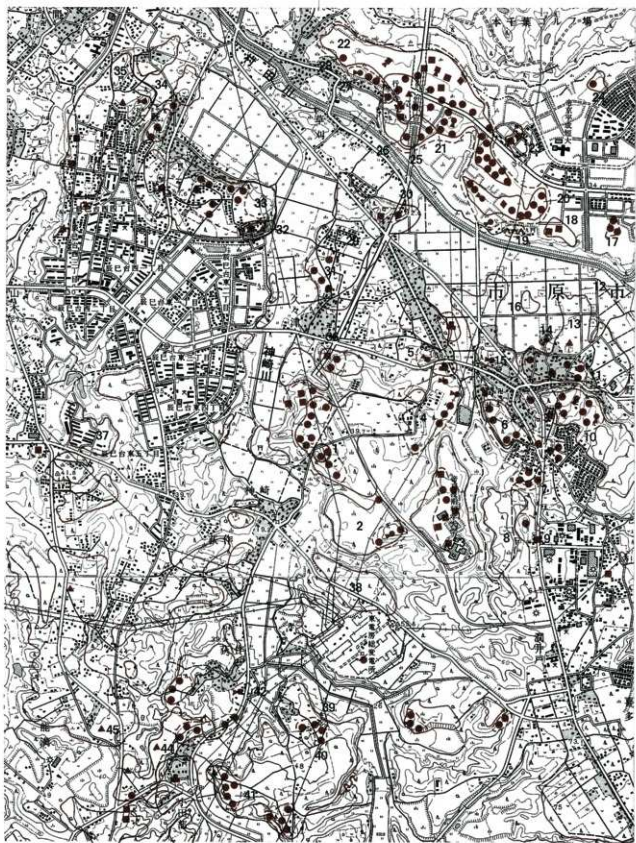
(3) 周辺の遺跡

村田川の中流域から下流域一帯は、かつての「菊麻国造」の勢力範囲にあり、その左右両岸に古墳群をはじめ数多くの遺跡が存在している。右岸台地上は旧石器時代から奈良・平安時代にわたる大規模な複合遺跡である草刈遺跡が位置し、左岸では村田川に面する低位段丘面に縄文時代中期以来弥生時代から奈良・平安時代に至るまで集落が形成されていることもこの地域の特色である。

旧石器時代では、下鈴野遺跡で立川ローム層から2つの文化層が検出されている⁴⁾。石器、石材とも多様なあり方を示している。また礫が多いことも特徴の一つである。第2文化層では同一母岩が複数のブロックにまたがって分布するケースが認められ、石器製作作業の状況を考える上での好資料となっている。各ブロックは舌状台地の基部付近にまとまっており、中潤ヶ広遺跡でも同様の状況が窺える。一方右岸では草刈遺跡、草刈六之台遺跡などで武蔵野ローム層最上部から立川ローム層最上部にかけて質・量共に豊富な内容の文化層が検出されている。特に草刈遺跡C区では県内最古とされる石器群が出土している⁵⁾。

縄文時代では右岸に草刈貝塚、川焼台遺跡、草刈六之台、左岸の潤井戸鎌之助遺跡、下鈴野遺跡など中期の遺跡が目立つ。このうち草刈貝塚は、広場を中心に小竪穴群と住居跡が環状に巡る構造を示す拠点的とも言える集落である⁶⁾。また、草刈六之台遺跡では小竪穴群が環状に分布する小規模な集落が形成される⁷⁾。潤井戸鎌之助遺跡は標高16m~21m前後の地点に立地し、土坑、竪穴住居跡、埴埴、地点貝層が検出されている。中期後半から集落が現れ、後期には地点貝層が形成され集落の拠点が移動するようである⁸⁾。隣接する潤井戸中横峰遺跡からも後期の竪穴住居跡が発見されており⁹⁾、鎌之助遺跡と同じ群とみてよい。下鈴野遺跡では住居跡と小竪穴の小規模な一群が検出されている¹⁰⁾。

弥生時代には、中期後半宮ノ台期に沖積地に面した低位段丘面や台地先端部に流域での活動拠点が形成される。集落は後期或いは古墳時代へと継続して営まれ、この地域での拠点集落に発展して行く。草刈遺跡では東西に広がる台地の西側先端部に環濠集落が出現する。環濠は後期前半まで位置を移しながら存続するようである。潤井戸鎌之助遺跡・潤井戸中横峰遺跡では中期後半から後期に方形周溝墓と集落が営まれる。またこの2つの遺跡から北西約1.5kmに位置する潤井戸西山遺跡¹¹⁾では中期後半に環濠が開削さ



- 1 中潤ヶ広遺跡・瀬井戸天王古墳群 2 潤ヶ広遺跡・潤ヶ広古墳群 3 下鈴野遺跡・下鈴野古墳群 4 瀬井戸山王後古墳群 5 瀬井戸杉山古墳群
 6 瀬井戸小谷古墳群 7 瀬井戸山夜塚古墳群 8 長者原遺跡 9 長者塚古墳群 10 下野寺谷古墳群 11 瀬井戸中横峰古墳群 12 瀬井戸中横峰遺跡
 13 瀬井戸雄之助遺跡 14 高野前古墳 15 宮後古墳 16 瀬井戸遺跡群 17 鶴牧古墳群 18 鶴牧遺跡 19 川焼瓦窯跡 20 川焼台遺跡
 21 草刈古墳群 22 草刈遺跡 23 中永谷遺跡・中永谷古墳群 24 ばあ山遺跡 25 草刈六之台遺跡 26 草刈3号墳 27 大宮神社古墳群
 28 草刈3号墳 29 瀬井戸西山遺跡 30 木津古墳群 31 久々津古墳群 32 大蔵遺跡 33 大蔵古墳群 34 大蔵二子塚古墳 35 大蔵細野貝塚
 36 居籠古墳群 37 南大広遺跡 38 磐り野遺跡 39 池ノ州山古墳群 40 萩作遺跡群 41 小田部古墳群 (小田部古墳・小田部原遺跡)
 42 萩作古墳群 43 能満分区貝塚

第4図 中潤ヶ広遺跡と周辺の遺跡 (1:25,000)

れており、隣接する草刈尾築遺跡¹⁹で発見された住居跡を含めた環濠集落の存在が推定されている。その下流の神崎川左岸の台地上に位置する大厩遺跡でも中期後半の段階で環濠集落が出現し、大厩浅間様古墳墳丘下からは中期宮ノ台期の方形周溝墓4基、V字溝2条のほか後期後半から古墳時代初頭の住居跡が検出されている。また神崎川中流域右岸に位置する小田部新地遺跡では中期から後期に方形周溝墓群が造営されている²⁰。後期後半には下鈴野遺跡で集落が形成され谷津奥部への移動・開村活動も開始されて行く。

古墳時代は、台地上を中心に古墳・古墳群が形成されていく。出現期古墳では、先ず本遺跡から南西約2.2kmの神崎川中流域左岸に小田部古墳が築造される。周溝の一部が開口する径23mの円丘状を呈する古墳で、墳頂部と周溝から東海地方の特色を強く持った土器群が出土している²¹。隣接する小田部向原遺跡では小田部古墳の周溝の一部及び古墳時代初頭の住居跡が検出されている²²。

小田部古墳に続く古墳として村田川左岸では中・下流域に菊間古墳群、大厩古墳群、その上流に本古墳群と前期古墳を擁する古墳群が存在している。菊間古墳群中では「菊麻」勢力初期の古墳と考えられる新皇塚古墳が4世紀中頃に築造される。全体の墳形は明らかではないが、後方部が一辺40m程の前方後方墳の可能性が強く指摘されている²³。大厩古墳群では大厩遺跡で調査された9基の古墳のうち方墳3基と大厩浅間様古墳がある。大厩浅間様古墳は直径52mの円墳で4世紀末頃の築造と考えられている。3基の木棺直葬の主体部をもち、珠文鏡・石鯛・刀子・短剣のほか瑪瑙・琥珀・ガラス製の玉類などが出土している。墳丘からは器台形埴輪の系列にある焼成前底部穿孔壺形土器が出土している点でも注目されている²⁴。一方右岸の草刈古墳群では、先ず前方後方墳の草刈A区99号墳を中心とする40基程の方墳群が形成される。中期前半には大型円墳の草刈1号墳、草刈3号墳が相次いで築造される²⁵。またこの時期には下鈴野古墳群中にも円墳・方墳が築造されている。村田川流域における前期から中期前半の古墳をその墳形で見ると、前方後方墳・方墳が先行し、その後円墳へと移行する。また分布域では概ね下流域から中流域に次第に拡散していく様相が看取される。集落では草刈遺跡、川焼台遺跡、下鈴野遺跡、潤井戸西山遺跡などがある。草刈遺跡では古墳時代を通じて集落が拡大傾向にあり、潤井戸西山遺跡では竪穴住居跡のほか掘立柱建物跡・四脚門跡・L字形に配列された冊跡が検出され5世紀から6世紀前半代の居館跡である可能性が指摘されている。

後期では前方後円墳が現れ、古墳群中では径20m前後の小円墳が次々と造営されて行く。本遺跡の東には前述した潤井戸山王後古墳群、潤井戸杉山古墳群のほかに谷津を隔てて全長41mの前方後円墳である潤井戸小谷1号墳を主墳とする円墳10基の潤井戸小谷古墳群がある。年代的には下総型円筒埴輪をもつ潤井戸小谷1号墳が先行し、潤井戸杉山1号墳が最終末に位置づけられるようである²⁶。

古墳時代終末から奈良時代以降は墳墓形態に変化が現れ、高塚古墳に変わる低墳丘の方墳或いは方形区画墓による造墓活動が盛んになる。本遺跡以外では下鈴野遺跡、小田部新地遺跡、潤井戸上横峰遺跡、ナキノ台、草刈遺跡などがあり、それぞれいくつかの群構成をとるようである。なお、この時期の集落は草刈遺跡を除いて調査例に乏しい。台地上での生活の場は次第にその姿を消して行くことになる。

注1「潤井戸天王台古墳群」〔第13回市原市文化財センター遺跡発表会要旨〕(財)市原市文化財センター 1998

2「千葉県文化財センター年報No22-平成8年度-」(財)千葉県文化財センター 1998

3「千葉県文化財センター年報No19-平成5年度-」(財)千葉県文化財センター 1993

4 島立 桂・土屋治雄・猪股昭喜「潤井戸地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ-市原市下鈴野遺跡-」(財)千葉県

文化財センター 2003

- 5 島立 桂「13 草刈遺跡」『千葉県の歴史 資料編考古1』千葉県 2000
- 6 伊藤智樹・大谷弘幸・西野雅人『千原台ニュータウンⅧー市原市草刈遺跡（東部地区縄文時代）ー』（財）千葉県文化財センター 2003
- 7 『千原台ニュータウンⅥー草刈六之台遺跡ー』（財）千葉県文化財センター 1994
- 8 「潤井戸織之助遺跡（第2次）」『市原市文化財センター年報 平成10年度』（財）市原市文化財センター 1998
- 9 「潤井戸中横峰遺跡」『第12回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』（財）市原市文化財センター 1997
- 10 大村 直『下鈴野遺跡』（財）市原市文化財センター 1987
- 11 鈴木英啓『一千葉県市原市ー潤井戸西山遺跡』（財）市原市文化財センター 1986
- 12 半田堅三「58 草刈尾梨遺跡」『千葉県の歴史 資料編考古2』千葉県 2003
- 13 山口直樹『小田部新地遺跡』（財）市原市文化財センター 1984
- 14 杉山晋作ほか『古墳時代研究Ⅰー千葉県市原市小田部古墳の調査ー』古墳時代研究会 1972
- 15 大村 直ほか『市原市姉崎宮山遺跡・小田部向原遺跡・雲ノ境遺跡』（財）市原市文化財センター 1991
- 16 白井久美子「215 菊間古墳群」『千葉県の歴史 資料編考古2』千葉県 2003
- 17 浅利幸一『市原市大塚浅間様古墳調査報告書』（財）市原市文化財センター 1999
- 18 大谷弘幸・白井久美子「59 ちはら台遺跡群」『千葉県の歴史 資料編考古2』千葉県 2003
- 19 萩原恭一「市原市杉山古墳測量調査報告」『千葉県史研究』第10号 千葉県 2002

第2章 遺構と遺物

第1節 古墳と遺物

1. SM-01 (潤井戸天王台古墳群19号墳) (第6～8図)

古墳 SM-02の東、B7グリッドに位置する。径20mを測る円墳で、墳丘裾部に幅の広いテラスが巡る。旧表土層を削り出して整形し、粗いロームブロックを含む黒色土を主体に盛土をして構築している。

周溝は全周すると思われる。周溝西側の一部は北西から南東方向に延びる溝状遺構SD-01に切られている。周溝の幅は3.5m～4m、深さ0.5m～1.2mで、谷側(南西側)に面する部分が深くなっている。盛土の高さは約0.5m、周溝底面から盛土上面までの高さは約2.1m、現表土からの高さは約0.9mである。埋葬施設は確認できなかったため、現道部分の切り通しで既に削平されている可能性がある。

遺物は、西側周溝の覆土中から土師器の甕が出土している。出土した層は、周溝底面から40cm程上のII層黒褐色土中である。一個体分が破片となっていて、出土レベルや破片の分布範囲にばらつきがないことから、周溝の埋没過程で墳丘から落ち、土圧で潰れたのか、あるいは故意に破砕され投棄された可能性も考えられる。ただ、いずれにしても古墳の周囲には整穴住居跡などの集落が存在しないことから、古墳祭祀に伴う遺物であると考えられる。

遺物 (第8図)

1は、土師器甕で約2/3が遺存している。長く膨らみの少ない胴部から口縁部が緩やかに外反する器形で、口縁部と胴部の境に僅かに稜を作り出している。また、底部は突出ぎみである。外面の調整は口縁部をヨコナデ、胴部は頸部付近を横方向、それから下を縦方向にヘラケズリ、内面は口縁部をヨコナデ、胴部はナデが施される。焼成は良好で、胎土に砂粒・白色粒を含む。色調は外面が黒褐色及びにぶい褐色内面はにぶい褐色である。内面上半は器面の剥落が目立つ。推定口径13.6cm、胴部最大径17.8cm、底径6.4cm、器高22.7cmである。時期は器形の特徴から6世紀中頃から後半の年代が考えられる。

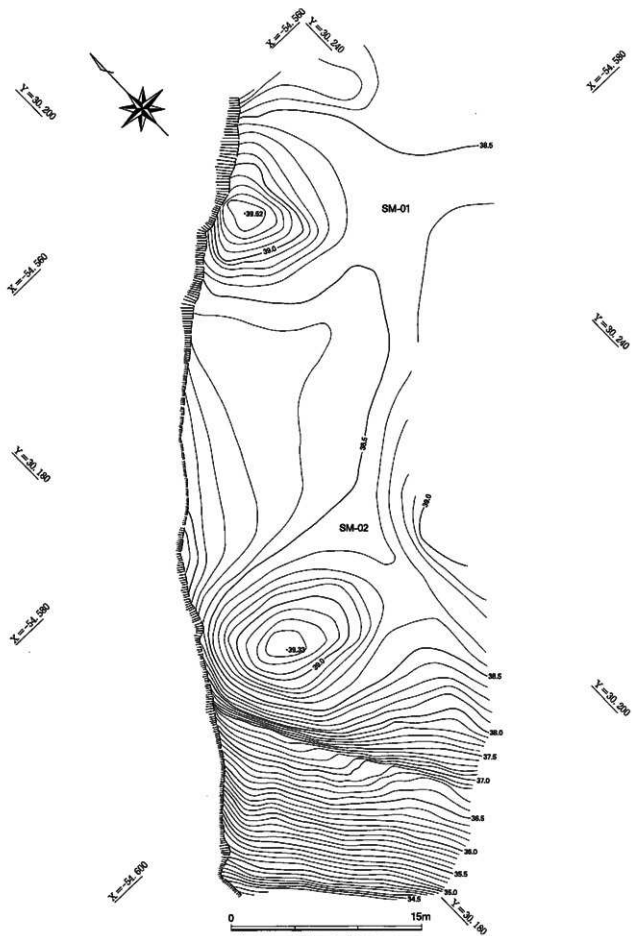
2. SM-02 (潤井戸天王台古墳群20号墳) (第9図)

古墳 SM-01の西約12m、A7グリッドに位置し台地端の斜面に面している。径約20mを測る円墳でSM-01同様墳丘裾部に幅の広いテラスが巡る。旧表土層を削り出して整形し、ロームブロックを含む黒色土あるいは黄褐色土を主体に盛土をして構築している。

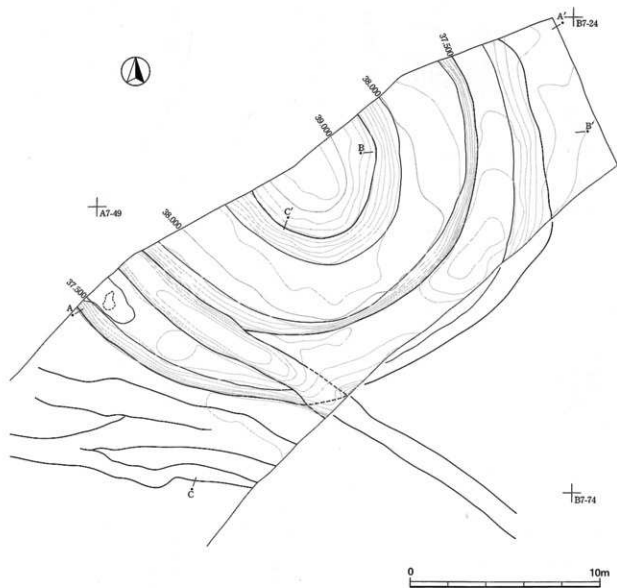
周溝は北東側で検出している。谷に面した南西側では墳丘裾部が道によって削平されていることもあって確認できなかった。周溝は幅3m～3.5m、深さ0.6m～0.7mである。

盛土の高さは約0.8m、周溝底面から盛土上面までの高さは約1.6m、現表土からの高さは約1mである。なお、第2主体部を覆う北東側の盛土は、周溝側にせり出していることから、第2主体部埋葬後に改めて盛り直されたと思われる。

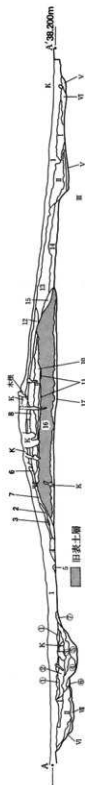
埋葬施設は墳丘中心部の墳丘下に1基、テラス部に2基、周溝内に2基の計5基が発見されている。この内墳丘下に位置する埋葬施設を第1主体部、テラス部北側を第2主体部、南側を第3主体部とし、周溝内は南側を第4主体部、北側を第5主体部とした。その他、墳頂部に近い表土直下で土坑1基が検出されている。検出当初はこの土坑を主体部として調査を進めたがその後第1主体部が検出されるに至り、他の



第5圖 古墳調査前測量図



第6圖 SM-0 1平面圖 (1:200)



0 8m

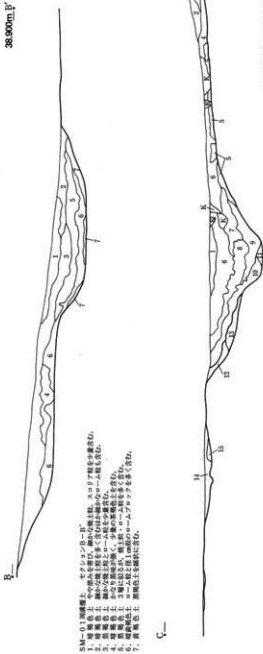
SM-0 1 墳塚土 セラファン A-A'

1. 墳塚土 2mm-5mmのセラファンを多く含む。
2. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
3. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
4. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
5. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
6. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
7. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
8. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
9. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。

12. 墳塚土 黒色土を伴ったセラファンを多く含む。
13. 墳塚土 セラファンを伴った黒色土を多く含む。
14. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
15. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
16. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
17. 墳塚土 セラファンを伴った黒色土を多く含む。

8. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
9. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
10. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
11. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
12. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
13. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
14. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
15. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
16. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
17. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。

38,500m'



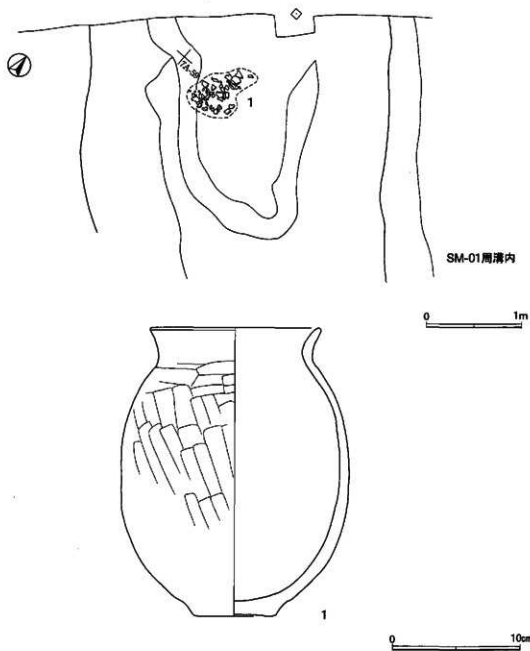
0 4m

1. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
2. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
3. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
4. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
5. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
6. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
7. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。

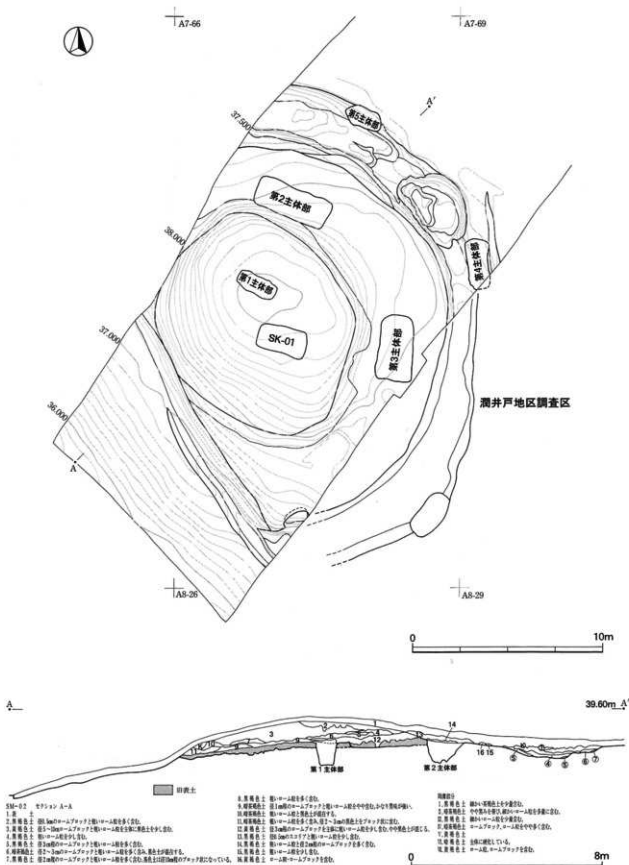
- SM-0 1 墳塚土 セラファン C-C'
1. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
2. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
3. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
4. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
5. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
6. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
7. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。

8. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
9. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
10. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
11. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
12. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
13. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
14. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
15. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
16. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。
17. 墳塚土 細かなセラファンを多く含む。

第7図 SM-0 1 墳丘断面図(1:160, 1:80)



第8図 SM-01周溝内遺物出土状況と出土遺物(1:40, 1:3)



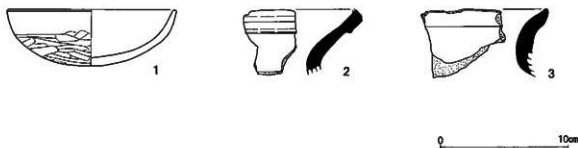
第9図 SM-02平面図と墳丘断面図(1:200, 1:160)

主体部と比較検討した結果、粘土ブロックなど棺部の痕跡が無いこと、覆土の状況も全体に異なることから、古墳とは切り離しこれをSK-01とした。

遺物は、第3主体部のやや北側テラス部の表土直下からはほぼ完形の土師器杯が出土しているほか、須恵器片や陶磁器片が表土中から出土している。

遺物（第10図）

1は土師器杯で、口唇部の約1/2を欠くがほぼ完形である。丸底で厚みのある底部から体部、口縁部がやや開きぎみに立ち上がる器形で、口縁部と体部の境に弱い稜を持つ。調整は外面を口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけて横方向のヘラナデ、内面は全体にヨコナデが施される。焼成は良好で、胎土にきめの細かい砂粒のほか、ごく僅かに白色針状物質を含む。色調は全体ににぶい黄褐色である。口径13.3cm、器高4.5cmである。2は須恵器壺の口縁部破片である。第5主体部に近い周溝上面で出土した。口唇部の端は欠けているが上方に小さく摘み出されている。外面の口唇部端と頸部に濃緑色の自然釉がかかる。胎土は緻密で、細かな白色粒が混入している。時期は、器形の特徴から陶邑TK-209号窯式併行と考えられる。3は陶器の壺の口縁部破片である。南側裾部で出土した。緩やかに外反する口縁部で、口唇部が上方に摘み出され、全体に丸みがある。口唇部にやや青みがかった釉が認められるものの、全体的には内外面とも褐色で照りのある自然釉がかかる。器面はざらついた質感である。焼成は良く焼き締まっているが、胎土は灰色でやや粗く、細かな長石粒のほか1mm前後の白色粒が混入している。特徴から濠美産としてよく、時期は12世紀中葉と思われる。

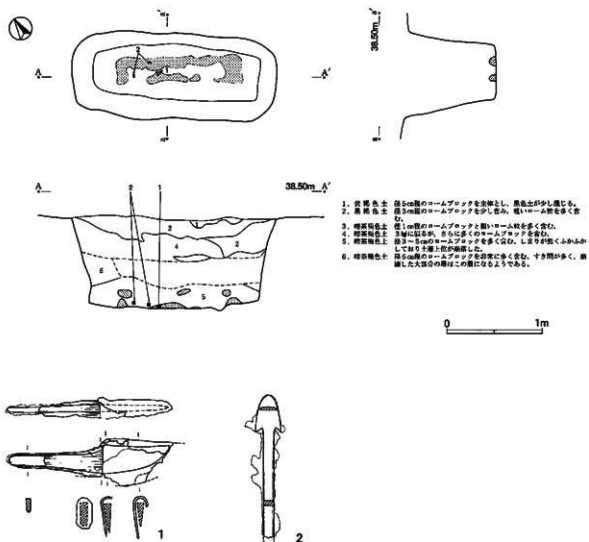


第10図 SM-0 2出土遺物(1:3)

第1主体部（第11図）

第1主体部は墳頂部よりやや北側に位置する。旧表土層上面から掘り込まれていたため、盛土の除去を行っている段階で検出された土坑墓である。掘形の規模は長軸2.1m、短軸0.9m、深さ0.9mで、掘形の底面に木棺を固定した粘土が残っていた。粘土が残っていた範囲は1.3m×0.3mほどであり、これを木棺の大きさと考えると、小児を埋葬した可能性がある。覆土は1層～6層に区分したが、中層以下が調査中に部分的に崩落するほど非常に柔らかく締まりが無く、堆積土中にすき間すら認められたような状態であった。おそらく遺骸埋葬後、土坑の上層を厚い盛土で覆われ、内部まで土圧が加わらなかったため、木棺が朽ち果てた後も半ば空洞化していたのであろう。

遺物は、木棺部の北寄りの底面直上から刀子1点と鉄鏝1点が出土している。第11図1は刀子である。刃部の幅が広いことや刃部の長さに比べ茎の方が長いことが特徴である。刃部には革鞘の一部が残存し、茎にも木質が良く残っている。2は逆刺のある長三角形式の長頸鏝である。



第11図 SM-02第1主体部と出土遺物(1:40, 1:2)

第2主体部 (第12~15図)

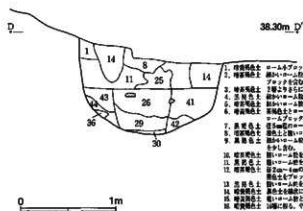
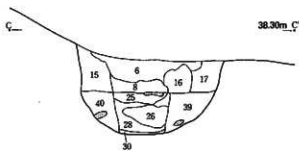
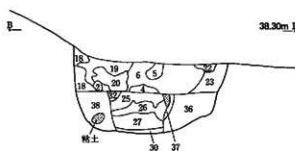
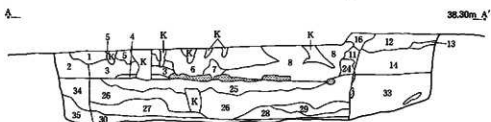
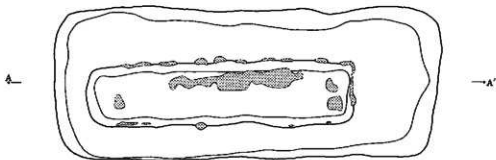
北側裾部に旧表土層上面から掘り込まれた土坑墓である。5基の主体部のうち最も大きく、長軸4.0m、短軸1.5mの掘形である。木棺部は周囲の一部が白色粘土で固定されており保存状態は良好であった。ただ、棺そのものは腐朽して残っていない。白色粘土は5cm前後の厚さで土坑上面から30cmほど下がった位置で検出されている。この白色粘土の範囲から、木棺の規模は長軸2.8m、短軸0.7m、高さ0.4mと推定される。遺物は刀子・鉄鏃等の鉄製品が出土した。鉄鏃の多くはかなり散乱した状態であった。これらは木棺の北西部に集中して出土しており、埋葬遺体の頭部はおそらくその方向を向いていたものと推定される。

第14図1・2は刀子である。1は両開で、一部に錆ぶくれが著しいものの茎には鞘の木質が良く残っている。2は茎部が長い刀子で、目釘穴は端に1か所穿たれている。

3~24は鉄鏃である。長頸鏃が主体を占めており、鏃身の形態により数種類に分かれる。3・5・6・8・9・13・18・20の8点は片刃式で開があり、4・18は片刃で開が無いものである。片刃式の特徴とし

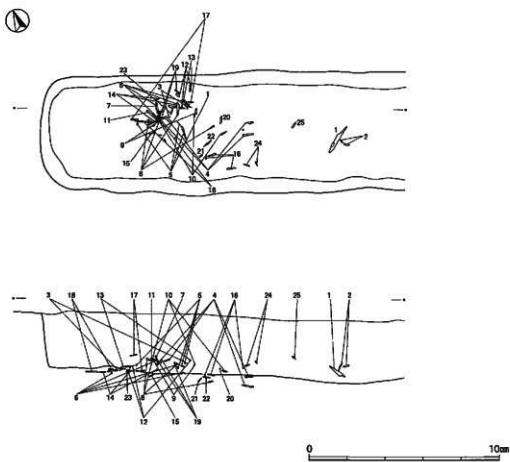


B' C' D'



- 17. 構造体土 壁100mm厚を多く含む。黒色土を少し含む。
- 18. 構造体土 壁100mm厚を多く含む。
- 19. 構造体土 壁100mm厚を多く含む。外周土が露出する。
- 20. 黒色土 壁100mm厚を多く含む。中層土が露出する。
- 21. 構造体土 壁100mm厚を多く含む。中層土が露出する。
- 22. 構造体土 壁100mm厚を多く含む。
- 23. 構造体土 壁100mm厚を多く含む。壁100mm厚を多く含む。
- 24. 構造体土 壁100mm厚を多く含む。壁100mm厚を多く含む。
- 25. 黒色土 壁100mm厚を多く含む。壁100mm厚を多く含む。
- 26. 構造体土 壁100mm厚を多く含む。壁100mm厚を多く含む。
- 27. 構造体土 壁100mm厚を多く含む。壁100mm厚を多く含む。
- 28. 黒色土 壁100mm厚を多く含む。壁100mm厚を多く含む。
- 29. 構造体土 壁100mm厚を多く含む。壁100mm厚を多く含む。
- 30. 黒色土 壁100mm厚を多く含む。壁100mm厚を多く含む。
- 31. 構造体土 壁100mm厚を多く含む。壁100mm厚を多く含む。
- 32. 黒色土 壁100mm厚を多く含む。壁100mm厚を多く含む。
- 33. 構造体土 壁100mm厚を多く含む。壁100mm厚を多く含む。
- 34. 黒色土 壁100mm厚を多く含む。壁100mm厚を多く含む。
- 35. 構造体土 壁100mm厚を多く含む。壁100mm厚を多く含む。
- 36. 黒色土 壁100mm厚を多く含む。壁100mm厚を多く含む。
- 37. 構造体土 壁100mm厚を多く含む。壁100mm厚を多く含む。
- 38. 黒色土 壁100mm厚を多く含む。壁100mm厚を多く含む。
- 39. 構造体土 壁100mm厚を多く含む。壁100mm厚を多く含む。
- 40. 黒色土 壁100mm厚を多く含む。壁100mm厚を多く含む。
- 41. 構造体土 壁100mm厚を多く含む。壁100mm厚を多く含む。
- 42. 黒色土 壁100mm厚を多く含む。壁100mm厚を多く含む。

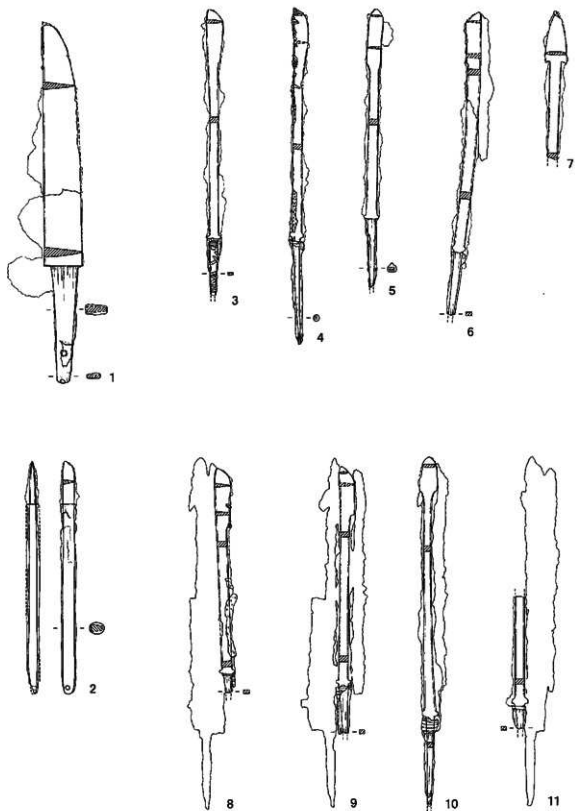
第12図 SM-0 2 第2主体部(1:40)



第13図 SM-02第2主体部遺物出土状況(1:20)

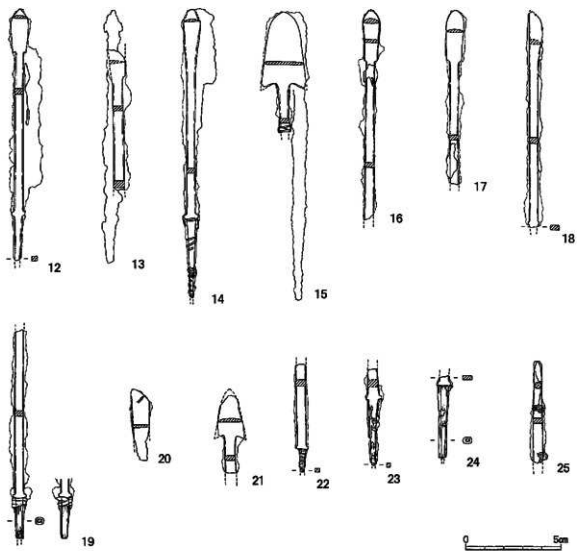
て全体に刃部が長く、頸部に向かって幅が狭くなるものが多い。7・10・12・16・17・21は長三角形式の範疇に入る。このうち7と21に逆刺があり、刃部の幅が比較的広い。また、10・12・16・17の4点は刃部が細長く剣身形とも呼ばれる形態のものである。14は無刃で、圭頭に近い形態である。15は広根系の腸扶長三角形式で、頸部に比べ鎌身が長い形態のものである。

25は先端部が尖る刺突具と思われる製品である。断面形は先端部が丸く、その下方は四角である。棒状部に紐巻きがされており、この部分で茎のような役割をしていたと思われる。



第14図 SM-0 2 第2主体部出土遺物(1)(1:2)





第15図 SM-0 2第2主体部出土遺物(2)(1:2)

第3主体部（第16・17図）

第3主体部は掘形の規模が長軸3.5m、短軸1.8m、確認面からの深さは0.7mである。明瞭な棺部痕跡は確認できなかった。ただ掘形の底面に2か所粘土塊があり、遺物の出土状況を加味して棺の大きさを推定すると、長軸1.8m、短軸0.8mほどに推定できる。内部からは直刀と刀子が出土した。また、覆土上層から土師器高杯が破片の状態で出土している。

第17図1は土師器高杯である。口縁部と体部の境に弱い稜を有する杯部に太く短い脚が付く。脚裾部は「ハ」字状に開き、裾端は丸みを帯びてわずかに扁平となる。杯部の調整は外面口縁部をヨコナデ、体部上半を横方向、下半を斜めにヘラケズリする。内面は口唇部をヨコナデ、体部から底面にヘラミガキを施す。外面脚柱部は縦方向のヘラケズリ、裾部は内外面ともにヨコナデ、脚部内面は杯部との接合部を粗く削り、そのまま縦方向にヘラケズリを施している。焼成は良好で、胎土に砂粒を多く含む。色調は内外面ともにぶい黄橙色である。推定口径13.8cm、器高9.0cm、底径11.0cmである。

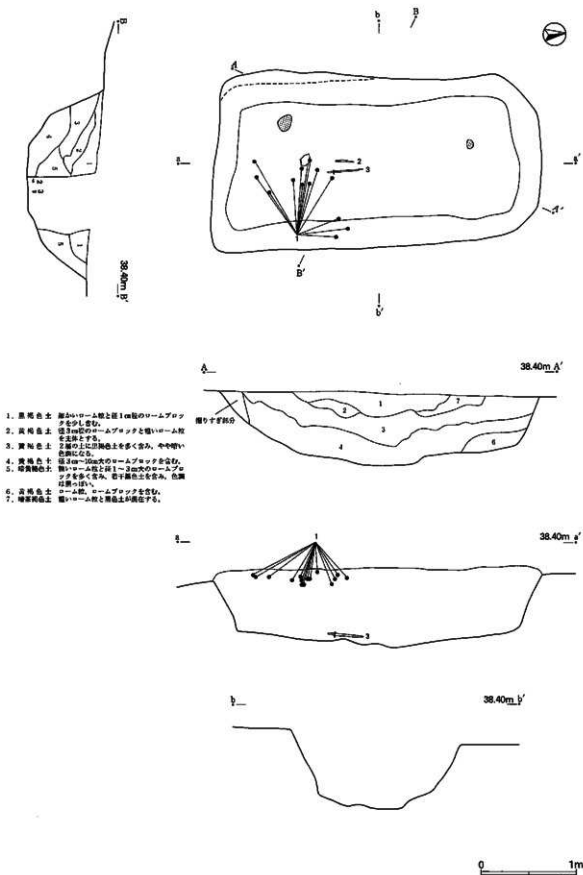
2は鉄製の刀子である。切先を僅かに欠いているが遺存状況は良好で、全長は約19.5cmである。関は片関で、刃部側の幅が広くなる。鐮から茎の中ほどまで木質が残存している。また茎の中程から端には幅1mmほどの紐が巻かれている。3は鉄製の小刀である。切先を僅かに欠いているが遺存状況は良好で、全長は約42cmである。関は両開式で、茎には目釘穴が2か所確認できる。鏝は卵形で、長方形の透かし窓が左右対称に2か所開く。鏝の側面には木片や布片が付着し、木片と鏝との間や側面に布の残片が付着している。刃部は全体に幅広で両側面に鞘木が残存している。

第4主体部（第18図）

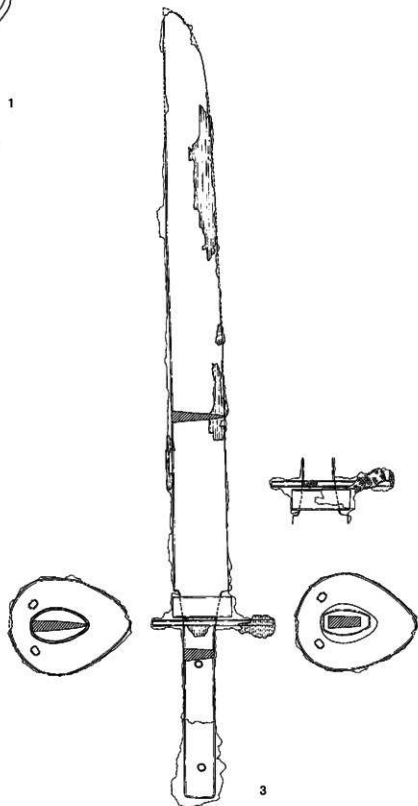
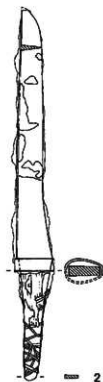
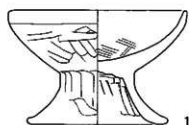
第4主体部は南側小口が調査区外に延びるため全体を検出できなかった。土坑は庇状の天井部を持つ有天井土坑で、底面に庇の崩落土がかなり大量に堆積していた。長軸は推定で約2.5m、短軸1.1m、周溝底面からの深さは0.6mである。遺物は出土していない。

第5主体部（第18図）

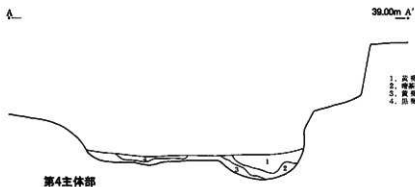
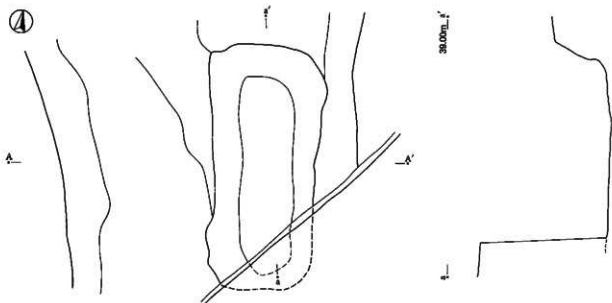
第5主体部は、第4主体部と同様に庇状の天井部を持つ主体部である。長軸2.2m、短軸1m、周溝底面からの深さは0.6mである。底面に庇の崩落土がかなり大量に堆積していた。遺物は出土していない。



第16図 SM-02第3主体部(1:40)

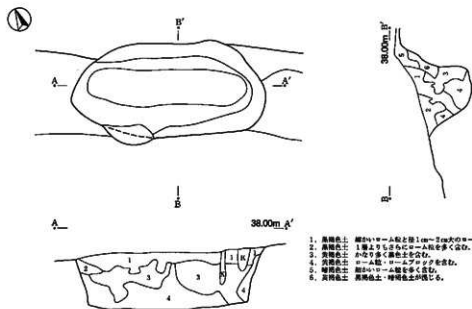


第17図 SM-0 2 第3 主体部出土遺物(1:3, 1:2)



1. 灰褐色土 コーム殻・ロームブロックを含む。
2. 暗褐色土 コーム殻・ロームブロックを少し含む。
3. 黄褐色土 灰褐色土とロームブロックを含む。
4. 灰褐色土 コーム殻・ロームブロックを含む。

第4主体部



第5主体部

1. 灰褐色土 細いローム殻と約1cm-2cm大のロームブロックを少し含む。
2. 灰褐色土 1層よりさらにローム殻を多く含む。
3. 灰褐色土 かなり多く腐土を含む。
4. 灰褐色土 コーム殻・ロームブロックを含む。
5. 暗褐色土 細いローム殻を多く含む。
6. 灰褐色土 灰褐色土・暗褐色土が混じる。



第18図 SM-0 2 第4・第5主体部(1:40)

第1表 金属製品計測表

鉄器計測表 [現存値]・(復元値), 単位mm

出土遺構	挿洞番号	全長	鎌身長	鎌身幅	鎌身厚	筥被長	筥被幅	茎長	現存重量(g)
SM-02 第1主体部	11 2	[75.4]	19.5	13.0	1.6	[58.4]	5.2	-	5.89
SM-02 第2主体部	14 3	[150.6]	[28.0]	9.0	2.6	92.6	4.4	30.0	13.41
SM-02 第2主体部	14 4	[176.5]	37.3	7.5	(1.8)	82.7	4.5	[56.5]	11.27
SM-02 第2主体部	14 5	[146.0]	29.5	7.5	1.5	80.5	5.0	[36.0]	10.73
SM-02 第2主体部	14 6	[159.8]	27.0	8.2	3.0	99	6.8	[33.8]	23.30
SM-02 第2主体部	14 7	[76.2]	25.5	11.0	1.7	[51.7]	5.0	-	-
SM-02 第2主体部	14 8	[118.7]	31.0	9.0	-	77	4.3	[10.7]	46.52
SM-02 第2主体部	14 9	[140.2]	26.0	7.8	-	88.7	4.8	[25.5]	-
SM-02 第2主体部	14 10	[184.0]	17.8	9.5	2.0	118.0	4.2	[48.2]	-
SM-02 第2主体部	14 11	[70.2]	-	-	-	[56.6]	4.8	[13.6]	-
SM-02 第2主体部	15 12	[132.5]	23.0	9.5	1.5	86.7	4.3	[23.3]	20.14
SM-02 第2主体部	15 13	[73.8]	[14.0]	-	2	[59.8]	5.2	-	-
SM-02 第2主体部	15 14	[152.0]	8.0	9.5	1.3	-	4.8	[41.7]	17.72
SM-02 第2主体部	15 15	[64.0]	40.5	23.7	1.5	25.5	5.0	[8.0]	-
SM-02 第2主体部	15 16	[111.2]	26.4	9.0	1.8	[84.8]	4.5	-	7.56
SM-02 第2主体部	15 17	[91.5]	27.0	8.2	1.5	[64.5]	4.5	-	6.84
SM-02 第2主体部	15 18	[114.0]	[18.8]	7.0	(2.3)	92.7	3.8	[2.5]	9.71
SM-02 第2主体部	15 19	[110.0]	-	-	-	[88.0]	4.6	[21.8]	9.40
SM-02 第2主体部	15 20	[37.8]	[30.0]	9.5	1.8	-	-	-	2.57
SM-02 第2主体部	15 21	[41.0]	[27.2]	[17.2]	2.0	[19.6]	5.5	-	3.81
SM-02 第2主体部	15 22	[56.8]	-	-	-	[44.8]	5.5	[12.0]	4.24
SM-02 第2主体部	15 23	[51.0]	-	-	-	[15.5]	5.6	35.5	2.97
SM-02 第2主体部	15 24	[43.5]	-	-	-	[5.0]	5.3	[38.5]	1.46

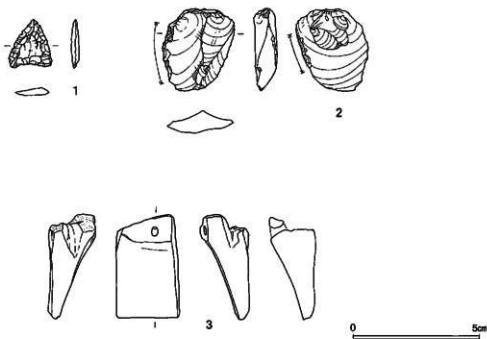
直刀・刀子計測表 [現存値], 単位mm

出土遺構	挿洞番号	全長	刀身長	茎長	刀身幅/背厚			茎幅/厚	現存重量(g)	
					開付近	中央部	切先付近			
SM-02 第1主体部	11 1	84.4	34.8	49.6	15.0/4.0	12.8/3.2	-	12.0/4.0	10.95	
SM-02 第2主体部	14 1	[122.8]	[23.0]	99.8	-	6.3/2.5	-	8.0/6.2	9.27	
SM-02 第2主体部	14 2	189.0	127.0	62.0	19.8/5.2	-	16.6/3.5	10.0/3.4	58.17	
SM-02 第3主体部	17 2	[194.6]	[130.6]	64.0	-	-	-	11.3/3.0	16.2/5.0	34.26
SM-02 第3主体部	17 3	[414.5]	[305.4]	109.1	29.0/-	27.5/6.0	-	26.0/6.5	-	

3. その他の出土遺物 (第19図)

古墳の盛土中や表土中から出土した遺物はそれほど多くはない。内訳は、縄文時代の石器、中期後半と思われる土器片、土器器では古墳時代後期のもの、陶磁器では中世の常滑の甕類破片などが出土しているが小破片が多い。図示できるものは限られたものとなった。

第19図1はチャート製の石鎌で、SM-01南東区で出土した。基部が平基形の三角形鎌で長さ18.2mm、幅16.4mm、厚さ3.4mm、重量は1.1gである。2は黒曜石製の搔器で、SM-02北区で出土した。左右の側縁に連続的な調整剥離が加えられているほか、切断面の一部に微細な剥離がみられる。長さ32.2mm、幅29.1mm、厚さ9.0mm、重量は7.5gである。1と2は縄文時代の所産である。3は凝灰岩製の砥石で、SM-02東側周溝と重複するSD-03の硬質面で出土した。片面に孔が開けられているため、下げ砥石として使用されたのであろう。穿孔部分を観察すると、上部の折れた面に孔が開けやすい程度に挟りを入れ、その後斜めに穿孔しているので、長期間使用して破損した後、補修して再利用したことが窺える。



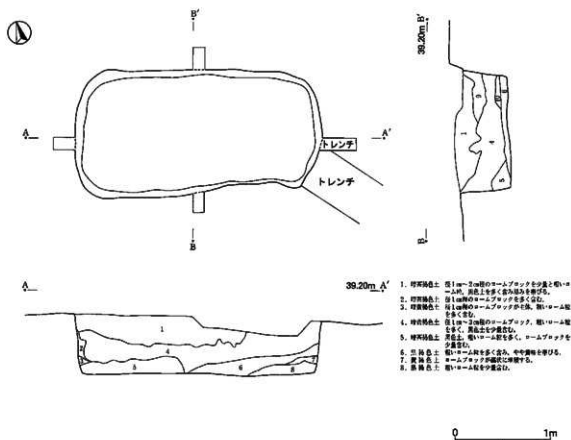
第19図 古墳出土のその他の遺物(2:3)

第2節 その他の遺構

古墳以外の遺構は、SM-02墳頂部で検出されたSK-01とSM-01・SM-02両古墳の間に検出された溝SD-01、道路跡SD-02、03がある。溝と道路跡は3条とも南東側に隣接する潤井戸地区から連なり、2基の古墳の間隙を縫うように平行して存在する。南東側は隣接する潤井戸地区で検出されている溝に連らなって台地平坦部を進み、その延長は約90mに達する。その反面、北西側では県道を挟んだ第2地点からは発見されていない。SM-01の西裾から地形に沿うように台地下にありていたのであろう。

SK-01 (第20図)

SM-02の墳頂部に位置する土坑である。平面形は長軸2.6m、短軸1.3mの長方形で、確認面からの深さは0.5m～0.6m前後である。覆土は全体に締まりが無く、古墳の盛土中で観察された粗いローム粒やロームブロックが混じるため、墳丘上から掘り込まれたと判断した。



第20図 SK-01 (1:40)

SD-01 (第21図)

SM-01の墳丘西裾を南東から北西方向に延びる溝である。SM-01の周溝と重複するが、特に北西側では周溝が埋没した後の窪地を利用するかのように、周溝の壁面の傾斜に沿って掘り込まれている。溝の幅は検出面で1.6m前後だが、北西側の土層をみると最大で3.7m程度まで広がっていたことがわかる。深さは40cm～80cmで、北西側では周溝底面より25cm程深く掘り込まれている。遺物は覆土中から出土していない。

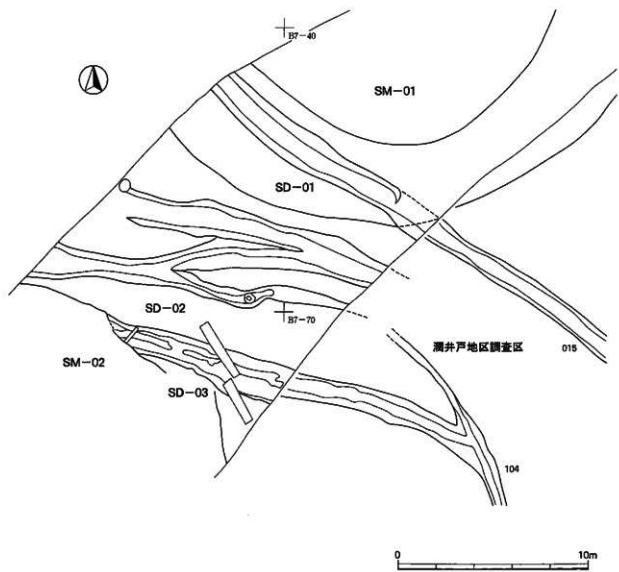
SD-02・SD-03 (第21図)

SM-01・SM-02両古墳の中間を南東から北西方向に延びる道路跡である。

SD-02は、平行する2条の溝から成り、中間の部分で分岐・合流している。溝の規模は北側が幅0.6m前後、深さ10cm前後、南側が幅0.4m～2.3m、深さ10cm～20cm前後である。2条とも上面から堅く踏みしめられ硬化していて、特に北側の溝では底面の硬化が著しい。なお、北側の溝の覆土中に焼土粒や焼土塊が混入しているが、性格は不明である。

SD-03は、SD-02の南に位置し、一部SM-02の周溝と重複する。幅1.4m～2.1mの中央部分に幅30cm～40cmの硬化面が残存していた。この硬化面の厚さは4cm前後で堆積している。硬化面の下はローム層が露呈するが、表面の凹凸が著しい。

この2つの道路跡間の平坦部にも硬化面が部分的に認められていることから、SD-02と03を合わせた範囲の間が日常の山道として頻繁に利用され、時に応じて左右に振れていたと思われる。



第21图 SD-01·02·03平面图(1:200)

第3章 まとめ

調査の結果、当初から確認されていた円墳2基以外では、溝状遺構1条、道路跡2条、土坑1基が検出された。今回の調査地は、前述したように中濶ヶ広遺跡全体から見ると果道に沿った狭い範囲の調査であり、遺跡の全容を解明できる段階には至っていない。したがってここでは、今回調査した2基の古墳の成果についてまとめておきたい。

今回調査した古墳は、径20mの規模で、総数40基を超える潤井戸天王台古墳群の中では中規模クラスの円墳である。墳丘の構築方法は2基の古墳ともに墳丘周縁の旧表土層を削り出して整形した後、盛土を行っている。墳丘裾部から周溝までの間は、現況での堆積状況からテラス状の平坦面を作り出している点でも共通した築造方法である。

主体部が発見されたのはSM-02の1基のみである。SM-01は失われた墳丘北側部分に存在した可能性が高い。なお、「潤井戸地区」(南側)の周溝内にSM-02第4主体部と同様の土坑1基が検出されている。SM-02は墳頂下に1基、墳丘裾部に2基、周溝内に2基の合計5基が検出された。このうち第1主体部、第2主体部、第3主体部は木棺直葬の土坑墓であり、木棺を据える際に白色粘土を用いている。周溝内で検出された2基の土坑では木棺痕跡が確認されていない。2つの古墳とも主体部を墳丘裾或いは墳丘外に設ける点で、常陸型古墳の系列に属するものである。

古墳に伴う出土遺物は、直刀・刀子・鉄鏃など金属製品と土師器、須恵器がある。金属製品はSM-02の主体部から出土したものに限られ、鉄鏃が主体を占めている。全体的な量はそう多くはない。鉄鏃は第1主体部から1点、第2主体部から22点が出土している。これらの形態は広根系の短頭鏃が1点ある以外はすべて長頭鏃である。鏃身の形態では片刃式のものと同長三角形式がある。長頭鏃のうち片刃式は10点あり、片刃と無刃がある。長三角形式は6点あり、そのうち逆刺のあるものが2点と両刃で剣身形を呈するものが4点である。また、無刃で主頭に近い形態のものが多様な様相を示している。土師器は、甕・杯・高杯がそれぞれ1点ずつあり、出土位置も周溝内、主体部上、墳丘テラス上と様々である。このうちSM-02第3主体部上層から出土した高杯は埋葬時に関わるものと考えられる。SM-01の周溝内から出土した土師器甕及びSM-02の墳丘テラス上から出土した杯は、いずれも墓前祭祀に関わるものと思われる。須恵器は甕の口縁部がSM-02の第5主体部付近から出土している。

これらの遺物から古墳の築造時期について考えたい。まず鉄鏃は、長頭鏃が主体を占める点で本地域の後期古墳から出土する鉄鏃に共通した要素を持っており、周辺の出土例で見ると、対岸の草刈古墳群の中永谷1号墳¹⁾や千葉市神名社裏古墳群と同様な傾向を示している。白井久美子による千葉市椎名崎古墳群出土鉄鏃の検討結果によれば²⁾、SM-02の鉄鏃群は三角形鏃の小型化以前の段階、すなわち第Ⅱ期の神名社裏古墳群第1号墳第2主体部出土資料と同じ段階にあり、6世紀後半の年代を想定できる。なお、直刀は二窓の銚を持つ比較的小振りのもので、千葉市小金沢古墳群に一例認められるが、同伴する鉄鏃群は本遺跡のものよりも後出的な様相を示している³⁾。

次に土器類については、集落遺跡出土資料と対比することができる。まず、SM-02の墳丘テラス上から出土した杯は、底部が丸みをもち口縁部が外傾ぎみに立ち上がる形態で、口縁部との境の整形も高杯と共通した手法をとることから、中永谷遺跡F類或いは椎津茶の木遺跡の杯i類に近い形態である⁴⁾。年

代は中永谷Ⅳ期、椎津茶ノ木第5期に該当し、6世紀中葉から後半の時期に比定される。また、SM-02第3主体部上層から出土した高杯は、脚上端がやや太く、杯部とのバランスが欠ける点で個性的であり、周辺遺跡の類例と個々に比較し難い。中永谷遺跡Ⅲ期或いは椎津茶ノ木遺跡の第4期の高杯f類に近く、杯がやや浅くなる点や内外面の調整、脚部の形態から判断すると、年代は6世紀中葉前後に相当すると思われる。須恵器は、口縁部の小破片で全体の器形を知ることはできないが、形態的にはTK-209型式に比定することが可能で、6世紀末葉から7世紀初頭と思われる⁶⁾。土器器よりやや後出ではあるが、年代的にはかけ離れてはおらず、むしろ追葬を考えると妥当な時間幅の中に収まると考えられる。

以上の点からSM-02の埋葬過程をたどると、まず古墳の主たる被葬者が墳頂下の第1主体部に埋葬され、第3主体部が6世紀中葉前後に、第2主体部が6世紀後半に、以後7世紀初頭までの間に周溝内の第4主体部、第5主体部への追葬が行われたと思われる。従って古墳築造の時期は6世紀前半に相当すると考えられる。古墳の被葬者像については、副葬品に豪華さは無く、武器類が主体である点を考慮すると地域の有力者層のうち軍事関係を掌握した者と推定される。なお、墳丘裾から出土した瀬美窯産の陶器は、東国では日用雑器として使用されたものより骨髄器など信仰を目的として使用された例が多いという指摘がある⁷⁾。SM-02の位置からみれば台地下縁辺に形成されていたであろう中世集落の信仰対象になっていた可能性もあり、墳頂部に掘り込まれた土坑SK-01の性格を暗示しているのではないかとと思われる。一方SM-01周溝内出土の甕は、その形態から胴部の長胴化が進みつつある中永谷第2期～3期、6世紀前半～中葉の年代に相当すると思われる。これを古墳築造段階の墓前祭祀に伴う遺物と捉えれば、SM-01はSM-02よりやや後に築造されたと考えられる。

前述したように、中洲ヶ広遺跡・潤井戸天王古墳群については、古墳時代前期から後期まで累々と古墳が築造されている。村田川左岸での周辺の古墳群を含めると、右岸に展開する草刈古墳群に匹敵する数の古墳が築造されており、「菊麻国造」の勢力圏となる村田川流域の中でどのような集団が存在していたのか、集落遺跡の解明を含め今後の課題と言えよう。

注1 白井久美子ほか『千原台ニュータウンⅣ中永谷遺跡』(財)千葉県文化財センター 1991

2 白井久美子『東国後期古墳分析の一視点』『千葉県文化財センター研究紀要10-10周年記念論集一』(財)千葉県文化財センター 1986

3 郷田良一・小宮 孟『千葉東南部ニュータウン10-小金沢貝塚-』(財)千葉県文化財センター 1982

4 注1に同じ

5 木對和紀『市原市椎津茶ノ木遺跡』(財)市原市文化財センター 1992

6 中村 浩ほか『陶邑 I』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1980
また、木對和紀氏より教示を賜った。

7 陶器の年代観及びその出土例について、櫻井教史氏より教示を賜った。

写 真 图 版





SM-01調査前全景



SM-01完掘後全景



SM-01完掘後全景



SM-01西側周溝及びSD-01全景



SM-01周溝内遺物出土状況



SM-01周溝内遺物出土状況



SM-02調査前全景



SM-02調査状況



SM-02第1主体部検出状況



SM-02第1主体部棺部検出状況



SM-02第1主体部遺物出土状況



SM-02第1主体部完掘状況



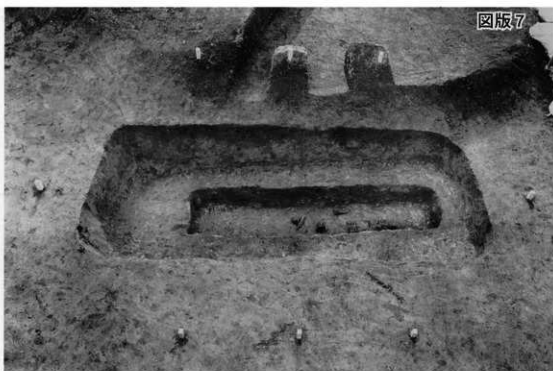
SM-02第2主体部検出状況



SM-02第2主体部調査状況



SM-02第2主体部棺部検出状況



SM-02第2主体部遺物出土狀況



SM-02第2主体部遺物出土狀況



SM-02第2主体部完掘後全景



SM-02第3主体部全景



SM-02第3主体部遺物出土狀況



SM-02第4主体部完掘後全景

SM-02第5主体部完掘後全景



SM-02テラス部遺物出土状況

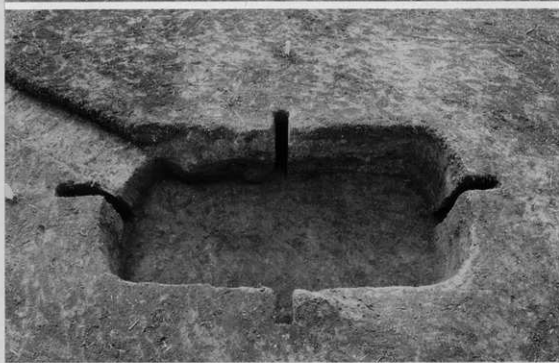


SM-02東側周溝





SK-01検出状況



SK-01完掘後全景



SD-02・03全景

第2地点西側調査状況



第2地点中央部調査状況



第2地点東側調査状況





1

SM-02第1主体部



2



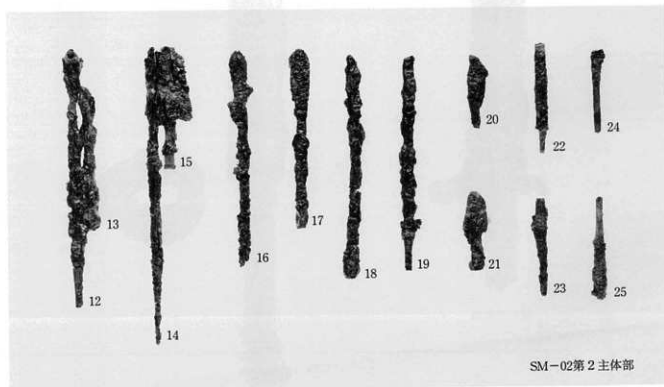
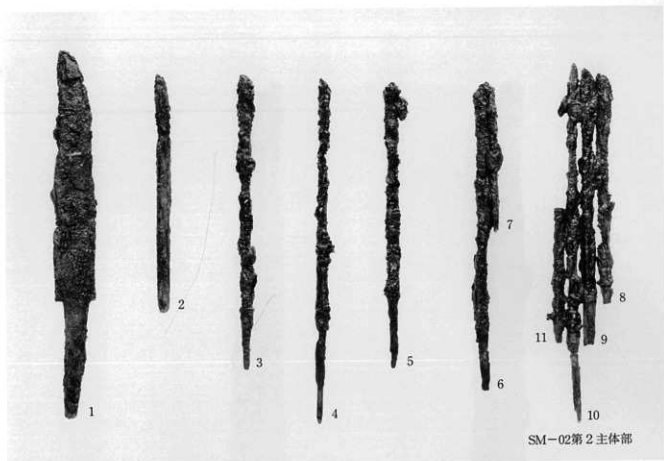
SM-02第3主体部3の銜



SM-02第3主体部2



刀子2の基部拡大



古墳出土金属器 (2)



保存处理前



3



SM-02第3主体部



SM-01 1



SM-02第3主体部 1



SM-02 1



SM-02 2



SM-02 3



1



2



3

報 告 書 抄 録

ふりがな	いちほらしなかうるがひろいせき
書名	山原市中潤ヶ広遺跡 (1)
副書名	主要地方道五井本納線住宅地関連委託 (神崎工区) 埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第518集
編著者名	伊藤智樹
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿波809-2 TEL.043-422-8811
発行年月日	西暦2005年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかうらがひろいせき 中潤ヶ広遺跡 (1)	ちばけんいちほらしなかうら 千葉県市原市潤井戸 字上潤ヶ台2, 273-19 ほか ちばけんいちほらしなかうら 千葉県市原市潤井戸 字上潤ヶ台2, 272-7 ほか	219	081	35度 30分 39秒	140度 09分 46秒	20010801～ 20011221	1,870	道路建設
						20021202～ 20021227	740	

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中潤ヶ広遺跡 (1)	散布地 古墳	古墳時代 中 世	古墳 溝跡 道路跡 土坑	2 1 2 1 土師器、須恵器、直刀、 鉄鍬、陶器	古墳2基の内1基から木棺直葬の埋葬施設5基が検出された。埋葬施設の位置は墳頂部直下や裾部、周溝内など多様なあり方を示している。副葬品は直刀など金属製品が主である。

千葉県文化財センター調査報告書第 518 集

中 潤 ヶ 広 遺 跡 (1)

—主要地方道五井本納線住宅地関連委託（神崎工区）埋蔵文化財調査報告書—

平成 17 年 3 月 25 日発行

編 集 財団法人 千葉県文化財センター

発 行 千 葉 県 県 土 整 備 部
千葉県千葉市中央区市場町 1-1

財団法人 千葉県文化財センター
千葉県四街道市鹿渡 809-2

印 刷 三 陽 工 業 株 式 会 社
千葉県市原市五井 5510-1
